

## 内地

激動の青春を

初年兵教育に徹した

想い出

愛媛県 呉 石 文 圭

(旧姓浅野)

私は大正十(一九二二)年、男七人、女一人の八人兄妹で育ち、農家の二男でしたが、事情があり農業学校に進みました。卒業と同時に村の産業組合に勤め、戦況が日々激しさを増す中で、役場の農会技手と共に、食糧増産に励みました。と同時にここは柑橘栽培の適地でありながら、近く作付統制令が発令されるといような時代でした。

五月中旬、松山連隊区司令部より徴兵検査の令状を受けました。

日頃より軍隊に入隊するのであれば、甲種合格の軍人として自分を發揮したいと念じておりました。八幡浜市公会堂で朝より検査が始まり、我が村より五十九人が検査を受け、私は身長が一メートル六十、体重五十六キロ、他に異状はなく、最後に徴兵官より、背中をパチツと叩かれ「頑張れ」との一言がありました。

もしかしたら甲種合格ではなからうかと検査終了を待ちました。検査は二時過ぎに終了し、一同が集まり結果発表となり、最初に発表された甲種合格者六人の内に私の名前があり、「歩兵第一七九番 浅野文圭」と読み上げられ、一瞬感激をし

たことを思い出します。

帰宅すると近所の人が数人来ておられ、すぐに「どうでした」と聞かれ、すぐに「甲種合格、歩兵第一七九番」の札を見せると、家族と共に良かったと祝福をして戴いたのが昨日の出来事のように感じます。以後、昭和十七（一九四二）年二月まで勤めた組合を退職し、農業の手伝いで体力の充実に努めました。

昭和十七年四月十日、西部第六十二部隊第一機関銃中隊に入隊の通知を戴きました。西門より営内練兵場に集合し、昼前に第一機関銃中隊（中川隊）に配属が決まり、私は第一内務班（班長高橋伍長）に配属されました。そして班長より内務班の規律、一日の作業手順、訓練の様子等が説明されました。当日夜は一階廊下で中川中隊長よりの訓示を受け、班長よりは内務班で明日からの計画を聞きました。

教官の徳永少尉、助教の高橋伍長、助手の石田

上等兵のメンバーで訓練が行われることの説明を受けました。そして教本を一通り支給（有償）を受け、九時消灯で第一日を終わりました。

二週間は営内練兵場での基礎訓練、以後は城北練兵場（現愛媛大学、日赤病院等の文京町一角）で日々激しい現役兵として訓練を重ね、吉田浜の実弾射撃訓練、小野村演習場における第一期検閲を控えての猛訓練等を重ね、七月十五日第一期の検閲を終了しました。

初めての日曜日は、朝より終日の外出の許可を戴き、同じ班内で幹部候補生として優秀な毛利君の恩師で駄場崎大尉殿宅へ招かれました。庭には新源泉が板囲いで流出しており、まずお湯に入つて来いとので毛利君と二人で露天の湯に入り、奥様の手料理で御馳走になり、さらに夕方までゆっくり休んで行けとの暖かい言葉に甘え、入隊以来三カ月余にして初めて人間らしく戻った一日を過ごしました。

翌日より松山城防空隊勤務の命令で、一週間天守閣の横のヤグラ跡（昭和十六年に放火魔の手により焼失した）に機関銃を据えての監視活動に勤務しました。週半ばに補充兵の入隊があり、広島県、山口県、島根県の兵隊が入隊してきました。私は、私を教育して戴いた徳永少尉、高橋伍長、石田上等兵の助手見習として検閲を終えたばかりの陸軍二等兵の、三カ月の初年兵教育を行いました。この兵たちが外地へ出征後は、今度は宇和島郵便局の屋上の防空隊に勤務の命令を受け、十日間位の勤務だったと思いますが、ここでの訓練場所は駅の近所のお寺「龍光院」の本堂横であり、立哨と訓練を重ねました。

再び応召兵を迎え、今度は一等兵として助手として兵教育を行う自信がつき、毎日教育に精励しました。その後は三カ月毎に召集兵が入隊する。そして初年兵の検閲が終わる毎に、四坂島防空隊「チ号演習」と言って、徳島県池田町における吉野川沿いの道路開設訓練です。そして酒保当番や

連隊本部当番などを一週間〇十日位の休養勤務を頂きました。

戦況は日々激しさが加わり、松山の陸軍部隊は解散となり、昭和十八年十二月に丸亀西部第三十二部隊に転属となり、同日第三機関銃中隊に編入され、引き続き初年兵教育の助手や助教を勤めました。

ここで幹部候補生教育と朝鮮兵教育について詳しく申し上げたいと思います。

将来の日本陸軍を担う初級幹部を指す兵に対する教育・訓練は一般兵と同じでは何の足しにもならないことは候補生自身も一番良く分かっている。規律の厳格さと日々の研鑽は一般兵以上で、少々の雨雪の日では、一般兵は班内研修をしている時でも、候補生は裸で営外庭で、私も一緒に基本訓練、基本体操の復習を重ねる毎日でした。中には大卒でありながら訓練に不満をもつ候補生もおり、そのような人は必ず脱落し、一般兵として

第一線に立たされ残念がった人のことを思い出します。

また丸亀西部第三十二部隊に初めて朝鮮兵が入隊をしました。各大隊に各々特化に数人宛だと思われましたが、軍機密で総人員は確認はできないものの、第三機関銃中隊には八人(小六卒が一人、小四修了三人、小二終了三人、小一修了一人)を受け入れることが命令で判明しました。

夜、島田大尉中隊長より私と教官高橋少尉二人が呼ばれ、「軍隊では私的制裁が半ば常識化されておる向きもあるが、こと朝鮮兵の教育には大変ご苦労があると思うけれども絶対に制裁等が起らないよう最善の努力をし、立派な兵士になるよう努力をせよ」との命を受けました。

翌日より教育に掛かるも、小一年終了の周徳根二等兵は日本の歩兵操典その他の教範が読めない。言葉も田舎の方では朝鮮語を常用しておっただらしく、内容を聞くと、学校は義務にはなっているが田舎では経済的な問題もあり、兵役に達しても学

習は前記のような内容だったことに、初めて教育の難しさに直面しました。しかし、彼らは日本の兵隊になれるという名誉と誇りを持っており、昔より「習わんお経は読めない」という諺のごとく、日数を充分掛けることとしました。しかし彼らの熱心さは買っても、内務班でも日々体力と気力が衰える感じがするようになり、このことを教官に申しました。

教官は、環境の変化かも知れないと野外行軍も計画しました。初秋のころだったと思いますが、行軍の途中で木陰のある所で二十分の小休止を取りました。出発になって一人足りないのを探していると、雑のうに俗に「タカの爪」という真つ赤な唐辛子を取って来ていました。

驚いて教官に相談をし、その兵に事情を聞きますと、「朝鮮では畑にあるものは誰でも取って食べるのが普通なのに、日本に来て赤いタカの爪が少ないので苦しんでおりました。今日は休憩時に畑に見受けましたので戴きました」と平気で言い

ます。朝鮮らしい風俗が見えてきました。そこで教官と相談し隊長に報告を申し上げました。教官は後で付近の畑の所有者を探し黙って採ったことの補償とお詫びに伺って一件落着を見たのです。

ところが翌日より八人の朝鮮の兵は別人のように活気が出て、真面目で訓練に一生懸命に頑張る姿に驚きました。そこで私は休日公用の時など「タカの爪」の買入に気を配ったことが思い出されま

す。三カ月の訓練後検閲を受け野戦へ出征してゆきました。最後に涙を流し「ありがとうございます。一人前の日本軍人として頑張ります」と胸を張って行く姿が昨日のように思い浮かぶこの頃です。

昭和二十年に入ると戦況は刻一刻と不利な状況となり、私も歩兵第四四九連隊第七中隊への転属の命令が下り、同日高知県香美郡於須町に移駐しました。当初網小屋で三日間宿営しましたが、グ

ラマン戦闘機の飛襲で郡内を一週間置きに転々と移動するような状況でした。物部川を境に西には満州より引き揚げた錦師団、東には護土師団が編成され、第七中隊は佐古村に約一個分隊位ずつ分駐しました。私は教官と原さん宅に宿営が決定しました。

すでに補充兵の動員が不可能な状態で三十歳〜四十歳の国民兵の応召兵を受け入れ、毎日来るB29重爆撃機、グラマン戦闘機の飛ぶ中で、大きい「やまもも」の樹陰で基本訓練を続ける毎日が続きました。そして訓練の間をぬって「キクラク山頂」に臼砲陣地造りをするため応召されてきた国民兵を使ったのですが、体に故障のある人が多い中での作業に、毎日脱落者が続出する毎日でした。

その中、八月に入り軍曹に任官と同時に第三大隊本部付を命ぜられ、この本部でも赤星真寿陸軍中尉殿が副官を兼ね、ここでも二人で国民兵の教育を受け持つ事となりました。ここでは養蚕室を借り上げ本部とし、訓練をする所は国道や県道し

がなく、僅かな公園広場は本土決戦に備えての使用でした。

道路は砂利道で、道端の草が茂る部分にタコツボを掘りました。農家より百貫積みリヤカーを借り出し（ゴム車で軽い）その上に板箱を乗せて米国のM四戦車に見せ掛け、兵には昔のソーメン箱を二つ切りにしたものに砂を詰め、十キロ位の爆薬と想定したものを背負わせ、タコ壺より這い出てそのM四戦車の下に突入し、兵一人が米国のM四戦車一台を破壊するという国土決戦に備えての実戦的な訓練でした。しかし教官も私も、日本国の最後は近いと心に秘める毎日でした。

八月六日、遂に新型爆弾（後に原子爆弾）投下を知り、日本も最後は新型兵器で応戦できると信じ訓練を続けましたが、遂に現実は八月十五日の終戦を迎えたのでした。

高知県には二個師団も駐在しており、連隊本部より届いた帰還計画を見ても、すでに指揮命令系

統は麻痺し、人員の掌握が困難をきわめました。毎日入って来る情報は、多度沖駅に着く石炭貨車の上で数人が死亡している、などでした。最後は大隊に集積した武器弾薬を高知空港まで運ぶ人員の確保すらできず、最後は赤星副官と二人で交互に大八車に自ら武器弾薬を積み込み、一日一往復がやっとの道のりを運びました。

そして昭和二十年九月二十九日には四国に台風が上陸し、大被害が発生しました。

副官と私の二人は九月三十日朝、汽車で帰郷の途につき、長浜駅に着くと、平野駅まで台風によって大洲盆地の線路が流されたとの情報があり、その日は長浜駅で野宿し、翌日夕方徒歩で帰宅しました。

軍律厳しい中にありながら昭和十八年の秋、ちょうど初年兵教育が終わった直後、人事係浅野準尉殿より事務室にお呼び戴き「君の家は農家でもあり、国は火の玉となり聖戦の遂行と並行して銃

後の増産を叫ばれる時代に入っており、播種が一週間遅れると二割も減収になるらしい。したがって今回は各種分遣当番を外し、食糧増産のための手伝い休暇を連隊で最高の十日間を与える」との命を戴き家に帰りました。

そして秋の麦の播種を済まし、村長の菊池美代七氏より感謝状を戴きました。原隊復帰をしましたが、私も初めて親の喜びに接することができたことを付記致します。

## 私の兵歴

大分県 広瀬 成光

私は、大正十一（一九二二）年七月一日、大分県大野郡千歳村倉波で生まれました。昭和十七（一九四二）年徴兵検査、名誉の甲種合格。昭和十八年四月十日、大分の歩兵第四十七連隊へ現役兵として入営しました。その当時の私の家庭は

父 健在 村役場公吏兼農業

母 健在 農業

長女 健在 家事手伝い

長男（本人） 健在 農業

以下五男三女の大家族で、子供は十人でした。

昭和十二年、厚生大臣より「子宝部隊」として表彰を受けました。

農業の規模は

水田 一町歩・畑 三反歩・山林 六反歩・

それに養蚕と大忙しで、元氣者揃いの家庭でした。